

# 開港 の ひろば

YOKOHAMA ARCHIVES  
OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100  
発行日/平成4年8月5日  
印刷/中川印刷株式会社  
横浜市広報印刷物登録第040006号 類別・分類C-BE160



図①



図②



図③

## 『横浜。パノラマ図』展に寄せて

### 画像の中のランドマーク

——クライストチャーチの鐘樓をめぐる——

元町百段上は横浜関内居留地のいわば定点観測地となっており、幕末以来幾度となくカメラが据えられ、横浜の都市景観の移り変りを記録してきた。しかし、その画像に撮影年月が記されることは稀れであり、画像を正確に年代順に並べることはそう容易なわけではない。着色写真ならば明治一〇年代から三〇

年代前半まで、絵葉書ならば三〇年代後半以降とおよその見当はつく。さらに撮影年代をしばらくももうとするならば、画像の中に目安となるべき建造物を探しだすことが有効であろう。

ことが可能である。まず明治四年(一八七二)に堀川寄りに側廊が増築される。そして、一三年一月の総会において、ガラート師の負担により鐘と鐘樓が教会に付加されたこと、また二六年一月の総会で鐘樓の撤去されたことが報告されている。すなわち、この鐘樓は明治一二年から二五年までの一四年間しか存在しなかったことになる。

図①の元町百段上からの俯瞰写真の中で目につくものに、中央右寄りの居留地一〇五番クライストチャーチの鐘樓がある。煉瓦造のようであり、高さは二〇メートルはあろうか。図③の明治三〇年(一八九七)頃撮影と推定される着色写真には確認できないことから、ある限られた時代にしか存在しなかったランドマークになる。

クライストチャーチが一八六三年(文久三)一〇月一八日献堂成り、明治三四年(二九〇二)山手に移転したことはよく知られている。クライストチャーチの動静は、年次総会の新聞報道によって追跡する

図②では、鐘樓よりも、本村通り(前田橋通り)をはさんだ空地に着目していただきたい。実は、この空地は単なる明地ではなく、明治一三年(一八八〇)一二月二〇日の、居留地一二三番ジャフレの馬車屋から発火し、隣地の一二四、一二五、一三六番の一面はもとより、向いの一〇六、一〇二、一〇三番を焼き払った大火の跡地なのである。まさに焼失地を画像の中に収めていることから、明治一三年末か一四年初頭の撮影になるであろう。その後、一〇六番の本村通り沿いには連棟の長屋が建設される(図③左手を参照)ので、図①は大火以前の状態を伝える写真ということになる。かくして、図①の撮影年代は、明治一二年から一三年にかけてのおよそ一年間にしぼることができたかと思う。

(良)

# 関東大震災前の 横浜をかたる

今回は、画家の高寺東海(本名 正雄)さんをお招きし、関東大震災前の横浜についてよもやまを語っていただきました。

高寺さんは、現在は東京にお住まいですが、明治三八年関内尾上町の商家に生まれ、実業のかたわら絵を学び、その後、商業画家として活躍されました。当館には、鮮やかな記憶にもとづいた生家付近などの絵、多数を寄贈していただいています。八月五日からの「横浜パノラマ図」展にも、その内の数点を出陳させていただきます。

——明治三八年、尾上町でお生まれになったと伺っていますか。  
高寺 ええ、満で八七歳になります。生まれたのは、尾上町五丁目八二番地。今の指路教会のハス向かいになります。最近、ガス灯が復元されていますが、昔と同じ場所ですれしいですね。

——お父さんの吉三郎さんは、陶器商を営んでいらしたのですね。  
高寺 加賀(石川県)から出てきました。若いときには、金箔打ちの職人だったのですが、雪が降ってはかりいところにいるのでは、物にならない。横浜には異人さんがいっぱいやって来て、景気がいいらしいと聞いて出てきたそ

うです。

——いつ頃、横浜に出ていらしたのですか。

高寺 明治の初めです。近所の商店の人たちも、いろいろなところから成功を夢見て、横浜に出てきています。当時、伊勢佐木町には、出身地の郷里にちなんだ「甲州屋」「信濃屋」などの店がたくさんありました。

——初めから尾上町で店を持たれたのですか。

高寺 いえ、それは無理ですよ。すでに加賀から出て来て、成功していた保土田商店に数年間奉公し、独立したそうです。保土田商店は、横浜公園近くの太田町に立派なお店がありました。



高寺東海氏

——高寺商店では、金箔も扱っていたのですか。

高寺 加賀から仕入れたのを売ってました。金箔を扱っているのは、横浜には太田町の鈴木商店と高寺商店の二

軒しかありませんでした。仏師、経師屋、仏具屋さん、それにガラスの金文字の職人、日本画の絵画きさんもお得意さんでした。

——陶器は、どういふものを扱っていたのですか。

高寺 伊万里、九谷、主には薩摩焼です。当時、弁天通には薩摩焼を売っている店がたくさんありました。

——薩摩焼というものは、どういう感じの焼き物ですか。

高寺 薄黄色くてヒビ模様が入った、派手な図柄のもので、外国人のお土産物として好まれました。外国人が玄関などの装飾用に買い求める物ですから、花活けにしても絵皿にしても五、六〇センチもある大きなものでした。

——図柄にはどのようなものがあったのですか。

高寺 日光東照宮のものは、良く売れました。それから、羅漢さんも売れました。鹿児島から真っ白な素焼きの物が送られてきて、それに絵付けをする画工さんに出します。画工さんは、みな相当の腕の人ですが、花鳥風月だけでは食えないので絵付け職人になるのです。

——画工さんは、どのあたりに住んでいたのですか。

高寺 久保山とか、横浜の中心からは離れたところに、庭にちょっと植木を置いて、弟子の二、三人を置いて、絵付けの仕事をしていました。

——絵付けされたものを焼き上げ、高寺商店で仕入れるのですか。

高寺 ええ、ショーウィンドーに並べます。それを異人さんたちが買いに来ました。

——外国人との対応は英語でやっていたのですか。

高寺 親父は言葉は分かりませんが、店員は、英語を勉強していたので、言葉は通じます。

——店員の人はどこで、英語を習うのですか。

高寺 外国人の家に奉公に行った娘さんが言葉覚え、その後、主人が国に帰ると、尾上町あたりの長屋に住み、商店の店員に英語を教えていました。そういう人は、たくさんいましたね。

——学校はどちらに行かれたのですか。

高寺 本町小学校から、Y校(横浜商業高校、今の市立横浜商業高校)です。関内にはもう一つ、横浜小学校もありましたが、商人の子はみな、高等科のある本町小学校からY校に行くのが普通の歩みでした。

——Y校には外国人の教師がいて、直接英語を教えてくれるのですか。

高寺 ミス・ユイイングというアメリカ人の先生がいて、一年生から英会話の授業がありました。日本語を使わせてくれないので、苦しまぎれに覚えてしまいました。ミス・ユイイングは、神奈川女学校でも教えていたそうで、お世話になった人はたくさんいるでしょうね。

——絵を画くことに興味を持たれたのは、いつ頃からですか。

高寺 子どもの頃からです。家にある

ものが全部美術品でしたし、きちんと着物を着て、正座をしてというのが苦手だったこともありませぬ。小学校では、絵はずっとトップでした。Y校でも「今度一年に入ったのが絵がうまいそうだから、美術クラブに入れよう」ということで、昔は上級生は怖かったですから、誘われるままに入りました。開校記念日とか、Y校の年中行事になっているグラウンド・ホテル前のポートルレースの時には、ポスターなどを画きました。上級生の英語劇「ウィリアムテル」などの背景も画きました。

— Y校に通っているころの学生生活というか、娯楽はどうだったのですか。伊勢佐木町の映画館にもいらしたのですか。

**高寺** 映画にも行きましたが、小説をよく読みました。Y校の図書館に並んでいる本を片っ端からです。徳富蘆花の『自然と人生』、漱石の『それから』とか、今でいう名作ですよ。本を読むことで、学校で習わない漢字を覚えて、文章も覚えました。

— もっぱら、文学青年だったのですか。

**高寺** そうでもないですよ。オデヲン座へも洋画を見に、よく行きました。「未完成交響曲」とか「アントニオとクレオパトラ」とかです。

— 映画の値段はいくらだったのですか。  
**高寺** 三〇銭か四〇銭でした。チャンバラは少し安く、二〇銭くらいです。当時は、おそば、カレーライスが一〇銭、天丼は三〇銭でした。

— 子供のころの遊びはどんなものがありましたか。

**高寺** グラウンド・ホテル前の海岸では、二センチほどのちっぽけな海老が取れました。てぬぐいを両手でもってすくうと、いくらでも取れました。食べることはできませんがね。それと今、テレビによく出てくる赤レンガ倉庫では、隠れん坊をしたりしました。

— ホンチというのもやりましたか。

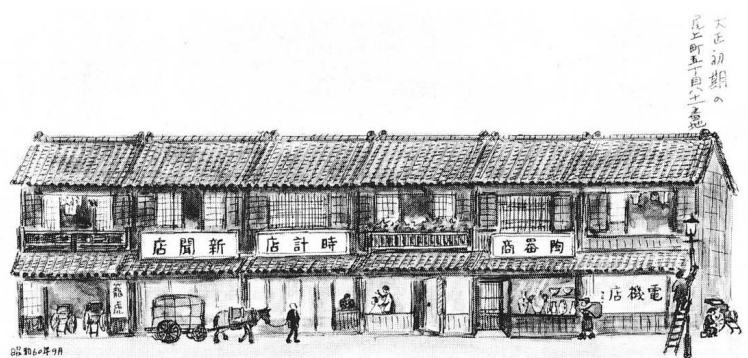
**高寺** ホンチ、知っていますか。伊勢山皇大神宮には、戦わせるための蜘蛛がいっぱいいるんですよ。小さな箱に入れておいて、蜘蛛を運動場のすみで戦わせるんです。箱から出したが最後、両方が闘争意識をむき出しにして、相手に食いつくんです。おもしろいですよ。なつかしい言葉を聞いたなあ。

— 最近また、復活してはやり出しているようですよ。ところで、以前に画いていたいただいた絵を見ると、当時の人たちの様子が伝わってきますね。写真や絵葉書とは違い、動きが伝わってくるようです。

**高寺** これを見て、「ああ、昔はこんなだったのかな」と思っていただけでしょう。うれしいですよ。

— 尾上町の図には、二階建ての長屋が連なっていますね。

**高寺** あれは皆、高島嘉右衛門の家作なんです。下級武士のお長屋を移築し、商人に貸したのです。商人の家には平屋はありません。ましてや、尾上町の通りには平屋なんかはなかったですよ。左端の桜木町寄りの籠虎、人力



高寺東海氏画 大正初期の尾上町

大正初期の  
尾上町五丁目高寺東海画  
M. Takajima

車屋さんです。うちの親父はお得意さんで、始終乗っていました。だいたい五銭か十銭でした。私もお正月には乗せてもらいました。

— ガス灯を点けに来ている人がいますね。

**高寺** 夕方になると、ガス会社の人が半天を着て、短いはしごを肩にかついで、手に火のついた棒を持ってやってきます。はしごをガス灯に立てかけ、チョロッと乗っかり、棒で火をつけると青い火がパツと。光に誘われ、コ

ウモリがいっぱいやって来るんです。

— お使いにやってきた、小さな店員さんもありますね。当時商店の人は、ほとんど和服を着ていたのでしょうか。

**高寺** ええ、うちの親父は年がら年じゅう着物に角帯でした。商人で洋服を着ている人はいなかったでしょう。

— 洋服を着ている人には、どういう人がいましたか。

**高寺** お勤め人は洋服でした。しかし、銀行員には背広の人もありましたが、着物に角帯です。夏は縞の羽織を着ていて、商人と同じなりました。

— Y校の学生は着物ですか、制服があったのですか。

**高寺** 神奈川中学や県立二中はゲートルを着ていましたが、Y校だけはゲートルがなく、詰襟は金ボタンでした。伊勢佐木町をまっすぐに歩いて一時間ほどかけて通いました。あの頃はまだ電車もなく、長靴もなかったもので、嵐の時には足元がベタベタになりました。でも、家に帰るとすぐ着物に着替えました。

— 向い側を画いた絵には、三階建ての大きな建物があります。

**高寺** 小田原屋という旅館です。もう一軒、小路をはさんで隣合わせに相模屋というのもありました。小田原屋は、奇術の松旭齋天勝の一座が横浜にやって来た時の定宿で、私の二階の部屋から練習しているところを見えました。公演は朝日座だったのですかね。修学旅行の学生も泊まっていたのですが、電灯が珍しいのかワイワイやりながら、点

けたり消したりしていました。

——この尾上町のあたりは、水道がひかれていましたか。

**高寺** 一軒一軒水道がありました。町場ですし、商家ですからね。味噌や酒を商っている向いのうちには、砂糖や塩を買いにやらされました。隣の竹内は同級生の家ですが、今も尾上町にあるでしょう。あの頃は、まだ料理屋でなかったけれど。

——お使いには、よく行かされたのですか。

**高寺** 商人は、台所の用事をお店の人にはさせません。だから、煮豆を買いに行ったりするのは、せがれの役目でした。お店の人の食事も皆、母親がやっていました。

——小田原旅館の先に銭湯がありましたが、風呂はそこに通ったのですか。

**高寺** ええ、尾上湯と言いました。自分の家に風呂があるところなんかありません。

——棒手振りの人の姿も見えますね。

**高寺** 子安、生麦あたりの漁師の子供が、「アサリ屋、イワシこ」と触れながら売りに来ていました。アサリやシヤコなどおいしくて、安くて随分食べました。アサリ売りの子供は、歩いて子安の方に帰りましたが、吉田橋の下からは、大江橋、弁天橋を通って、神奈川に向けて蒸気船が出ていました。一銭蒸気と言っていました。

——一銭蒸気に乗ったことはありませんか。

**高寺** お店の人がお使いに行く時、いっ

しょに乗せてもらいました。吉田橋の下からボンボン。横浜ドックのところを通って、うれしかったですね。

——中華街にも行きましたか。

**高寺** 中華街にはお得意さんがいたので、お使いに行かされました。うちの店で伊万里焼や、薩摩焼などを仕入れて中国に送る商売をやっている人がいましたから。

——中国人の服装などは、覚えていましたか。

**高寺** うちに来る人は皆、頭は弁髪で、真っ黒い縞子を着て、靴も縞子でできた、先がヒューととんがっているのを履いていました。労働者じゃないんだということだね。誰もが、日本語が上手でしたね。

——中華街の雰囲気はどんな印象を持っていますか。

**高寺** 今ほど立派ではありませんが、やはり食べ物屋が多く、薄暗いところもあり、ベタベタした感じも受けました。

——味のほうはどうでした。馴染の店はあったのですか。

**高寺** 馴染というのにはなかったけれど、薄汚れた感じの店の方が、案外料理はおいしかったですよ。

——ところで、お父さまが亡くなられた時の葬儀の様子も画いていたではないですか、あれは大正八年七月でしたね。

**高寺** Y高の一年生のときでした。一、三年ほどは、商売を続けましたが大正十二年の関東大震災の少し前に店をた

たみ、鶴見の子安に移りました。

——普通は、三代目が店をつぶすといいますが、二代目というのはちょっと早いですね。

**高寺** 悪さをして、身上をつぶしたのではなくて、とにかく商人というのがいやだったのです。

——商人が嫌いというのは、どういう点なのでしょう。

**高寺** だって、商人はつらいですよ。休みは正月三が日とお盆だけで、年中無休ですよ。それが一生続くと思うと、いやになっちゃったんですよ。それに、金箔をはがすのは辛いんですよ。

——お父さまは、横浜に出てきてからも金箔を打っていらしたのですか。

**高寺** いえ、加賀で打ったのを仕入れ、うちではがすのです。薄紙にはさまれているのを、竹でできたピンセットの

ようなもので、一枚一枚はがすのですが、夏の暑いときにも、きちんと着物を着て、正座をして衝立を置いて、なにしろ、ちよいと歩けばパーと飛んでしまし、汗はだらだら出るし、辛かったな。私は、金より自由が欲しかった。それで絵画きになったんですよ。

——絵はどちらで、習われたのですか。  
**高寺** 東京の同舟舎という画塾に通いました。

——横浜には、いい先生はいなかったのですか。

**高寺** 横浜には画塾はありませんよ。同舟舎というのは、上野の美術学校の教授で、帝展審査員の小林万吾という人がやっていた洋画の画塾で、たくさ

んの人が学んでいます。

——高寺さんに画いていたいたしたのは、日本画風ですよな。

**高寺** 絵で身を立てるつもりでしたから、日本画も習ったのです。油絵だけでは、飯は食えないのです。私は銭もうけが大好きで、貧乏はまっぴらですから。

——商人は嫌いだとおっしゃったけれども、やはり商家の息子さんなのですか。日本画を習ったのも東京ですか。

**高寺** 目黒に、やはり上野の美術学校を出た小林源太郎という人の城南美術という画塾があり、そこで習いました。油絵を習っただけでは、写真を見て画くという職人芸はできません。両方月謝を払っておいでよかったですよ。

——先ほどのお話だと、震災の時は子安にいらしたのですか。

**高寺** ええ、尾上町にいたら死んでたでしょうね。ラッキーですよ。

——東京で勉強されていた時は、どちらにお住まいだったのですか。

**高寺** 子安から通っていました。そして横浜で仕事をするようにもなっていました。当時は商業的な画は、きちんと勉強したうえで画く者はいませんでしたから、強みでしたね。それに、親父の関係で「どうだ、うちのこんなピラを画いてみないか」と言われ、それが「なかなかいいじゃないか、次も頼むよ」、「うちのも画いてくれ」といった注文が次々にきました。やっぱり親父のおかげもあったんですね。

——はじめから商業画家として身を立

てようとなされたのですか。  
**高寺** なかなかお金にならない芸術家は嫌いでしたから。私はハングリーなんてまっぴらですよ。

——商業画というのは、どういうものを画いていたのですか。

**高寺** 絵で一番金になったのは、馬車道の楽器店のショーウィンドウの背景の仕事です。今は映画館になっていませんね。

——西川楽器でしょう。開港資料館には西川楽器で作られたオルガンがありますよ。

**高寺** 女主人のお千代さんという人がいて、横浜では有名なハイカラさんでした。私はバイオリンを習っていたので、楽譜を買いに行きましたが、ハイカラぶりに圧倒された記憶があります。西川楽器が後に日本楽器になり、月に二回ずつ仕事をしました。伊勢佐木町の楽器店、白髪楽器店の仕事もしました。白髪楽器店は、初め吉田町にあったのですが、大正琴が流行り始めたころに、店で大正琴を弾かせながら商売をしたら大当たりになり、伊勢佐木町に進出しました。ポスターも画いたし、随分稼がせてもらいました。

——伊勢佐木町で思い出されるのは、ほかにどんなことがありますか。

**高寺** 吉田橋を渡ってすぐのところ「みのや」という羊羹屋が今でもあるでしょう。

——ええ、最近まで御隠居さんが日本髪で店に出いらしたそうですよ。

**高寺** 評判の美人で、その人をみんな

で見に行きました。当時はお嫁さんですが、大丸髻で赤いタスキを掛け、名物の酒まんじゅうを買ってこいと言われると、喜び勇んで行ったものです。

——思わぬ、青春の一頁を聞かせていただきませんか。お友達と若いころの話もされますか。

**高寺** Y校のクラス会を毎年やっています。皆、「高寺は昔の町の様子をよく覚えてるな」と言いますが、今と違って始終お使いにやらされましたからね。関東大震災後になくなった「六道の辻」のあたりも覚えています。同級生の家のもち菓子屋、文寿堂という大きな文具屋、伊勢屋という紙屋、全部覚えていきますよ。

——震災の後も横浜で仕事をされていたのですか。

**高寺** 鶴見から伊勢佐木町にやってきました。商店のショーウィンドウに宣伝文句を入れた絵を画くと品物がよく売れました。

——たとえば、どういうものですか。

**高寺** カパン屋さんでは帰省時期に「故郷の山河はあなたの帰省を待っている」「久々の帰省 妹にはこれ、弟にはこれ、あつ、おふくろさんにはこれ」という具合です。参考書を買いだんだり、自分が買う気になって一生懸命考えました。絵を画いて金をもらうのですから、必死でした。

——東京へは、いつ頃移ったのですか。

**高寺** 戦争が拡大してくると、絵で食っては行けないだろうと思ひ、それなら職工になろうと考えたのです。東京の大崎にある、明電舎に紹介してくれる人があって、巻線の職工になりました。それを機会に武蔵小山に引っ越ししました。

——絵画きさんからは大転身ですね。  
**高寺** 商人のせがれだから、そのへんは敏感ですよ。それと、親父がいつも言っていた「見栄張るより頬張れ」という言葉も頭にありました。

——終戦後はどうされたのですか。  
**高寺** 明電舎は空襲で燃えてしまったので、露店をやり何でも売りました。すぐに進駐軍がやってきて、新聞に英語のできるものを求めているという広告が出されました。そこでさっそく、米軍に行き「ニュース・ペーパーを見たい」と言ったら、タイプを打った書類を読めといわれ、読んだらすぐに採用されました。人事課に配属されたのですが、追い出されたら大変だから、英会話の本を買ひ込み必死に勉強しました。米軍には五年半いました。

——現在の高寺図案社を興されたのは、その後ということになりますか。  
**高寺** あの頃は、いろいろなことをやりました。パチンコの台にエナメルで絵を画いたりもしました。東海道五十三次とか、桜だ、藤だという注文に応じて画きました。世の中が落ち着いてくると、商店を新しくできるようになり、そうすると開店ビラの注文が来るようになり、開店祝をもって行く時には、お金だけでなく肉筆のビラを添えると店に貼ってもらえるし、ビラはずいぶんはやりましたね。

——今でも、横浜にはスケッチにいらしていますか。  
**高寺** 時々やってきています。桜木町の駅を降りると懐かしくなりますね。尾上町の家から弁天橋の川に沿って、本町小学校に八年間通ったのだから。

——今では皆ビルになって、随分変わりましたでしょう。  
**高寺** ええ、しかし川は変わりませんからね。

——現在も絵は画いていらっしゃるのですか。

**高寺** 今は、お中元の添え物にする団扇を画いていまして、けっこう忙しいんですよ。図柄は、オーソドックスな金魚、朝顔、山水を画いています。あとは、毎年秋口に東京芝増上寺で行われる港まつりで、チャリティーの絵を画いています。

——どんな絵を画かれるのですか。

**高寺** はがき大の大きさの和紙に、柿とか、景色とか、とにかくきれいなものを選んで画きます。外国の人もたくさん来ますので、英語で「不幸な人を助ける」と書いておいて、そうすると、一人で三枚くらい買って、来て、「テンキュー」って握手して。

——それは、大変いいことですね。お元気で、いつまでも画き続けていただけるといいですね。本日は、長時間ありがとうございました。

(六月一日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の佐藤孝、齋藤多喜夫があたりました。)

展示余話

「横浜開港への道」

「幕末の外交と遠国奉行」

前回の展示では、長崎・新潟・下田・函館などに置かれた遠国奉行を取り上げ、幕末期の波乱に富んだ対外情勢のなかで、海岸防備と外交に活躍した遠国奉行たちの様子を明らかにした。そのなかでいくつか新しい資料を紹介したが、その一つが、ここで取り上げる小笠原家文書(酒川玲子氏所蔵 当館保管)である。

小笠原家文書は、約一〇〇〇点に及ぶ、主に小笠原貞蔵とその養子甫三郎その跡を継いだ弥吉の小笠原家三代に渡る記録である。本資料に関しては、すでに前企画調査室長の故阿部征寛が、本紙六号・一〇号・一一号で取り上げているが、今回は新資料を加え、貞蔵・甫三郎親子の履歴をたどりたい。なお本資料の目録は、『横浜開港資料館紀要』一〇号に掲載されているので、こちらも併せて参考にされたい。

小笠原貞蔵

『小笠原貞蔵履歴下書』(由緒書五〇)によると、小笠原貞蔵は、寛政元(一七八九)年陸奥国松前に生まれ、その後松前奉行の同心として新規に抱え入れられた。同心としてネムロ・クナシリ見廻り、エトロフ島警備、ソウヤ話などを務めたという。  
文政六(一八二三)年三月、三五歳

で親戚の名跡を継ぎ幕臣となり(仲間間触番之者)、同年六月御使へ、天保元(一八三〇)年には四二歳で小人目付へ転じた。以後、天保一二(一八四一)年に小人頭となるまで、約一一年間小人目付を務めた。(『由緒書』由緒書一一)

小人目付に転じて以後、天保一〇年、鳥居耀蔵の配下として御備場見分御用を務めるまでの、貞蔵の軌跡を知ることのできる資料は乏しい。しかし『天保九年伊豆七島凶并家数人別里程附』(地図二)から、幕府の測量事業に関わっていた可能性を指摘できよう。

貞蔵が歴史の表舞台に登場するのは、天保一〇年一月の、伊豆・相模・安房・上総四ヶ国の御備場見分御用からである。見分は、貞蔵らを従えた目付鳥居耀蔵と、当代随一の測量家奥村喜三郎・算術家内田弥太郎らを従えた江川担庵によって行われた。この見分を機に、林家出身で守旧派の鳥居耀蔵と、渡辺華山に師事する開明派の江川担庵との対立が表面化し、対立は蜜社の獄へと発展した。そして貞蔵は鳥居の配下として、それらの事件に関わっていくのである。

この間の経過は、『勤仕録』(日記二)・『渡辺華山探索一件』(公務九六)・『渡辺登蘭書一件』(公務六八)などによ

り、具体的に知ることが出来る。

蜜社の獄は、天保一〇年一二月、渡辺華山が在所田原で蟄居、高野長英が永年、元徒土本岐道平らが押込めの処分をうけ、決着した。その功により貞蔵は、天保一二年八月小人頭、翌天保一三年七月には、長崎奉行与力に命ぜられ、長崎奉行で鳥居耀蔵の姻戚である井沢美作守正義の配下となった。

小人目付の俸禄は、一五俵一人扶持に過ぎないが、小人頭は八十俵、長崎奉行与力は一〇〇俵一人扶持であり、貞蔵の小人頭、長崎奉行与力転進は出世であった。

貞蔵は約二年長崎奉行与力を務めたのち、弘化元(一八四四)年二之丸火之番となり、翌弘化二(一八四五)年十二月死去した。五七歳であった。

しかし甫三郎への家督相続がおこなわれていなかったため、貞蔵の死は伏せられ、名代により小普請入りの手続きが取られた(『諸願文控』公務一九)。そして翌弘化三(一八四六)年一〇月、甫三郎が家督を相続したのち、その死が公表された(『由緒書』一三)。

小笠原甫三郎

貞蔵が長崎奉行与力に転じた天保一三年、山口甫三郎との養子縁組が成立した。『小笠原甫三郎小伝』(以下『小伝』由緒書四二)によると、彼は幕府普請役山口茂左衛門の子として江戸に生まれ、幼いときより学問を好み、本邦在来の砲術などを修めたという。しかし天保一二年、徳丸原で高島秋帆が

行った西洋砲術演習を見るに及び、高島門下の下曾根金三郎のもとで西洋砲術を学ぶようになった。彼の『芸術書付』(公務九)によると、下曾根金三郎のほか奥村嘉三郎・内田弥太郎らに師事していることが分かる。

甫三郎が師事した下曾根金三郎の師高島秋帆は、長崎会所調役頭取であった天保一三年一〇月、会所の肅正を理由に長崎奉行井沢美作守によって逮捕された。逮捕の背景には、鳥居耀蔵の意向があったという。

また奥村嘉三郎と内田弥太郎は、二人とも高野長英の弟子で、貞蔵が蜜社の獄の探索に際し、「(蘭学者幡崎)鼎を尊信し、蘭学の講釈承り候人びとの由、鼎御預けに相成り候のちは、長英ならびに三宅土佐(康直) 家来にて家老渡辺登(華山)と懇意いたし候由」『渡辺華山探索一件』(公務九六)と鳥居耀蔵に報告した人物であった。

甫三郎は、弘化三年二七歳で家督を相続し、嘉永元(一八四八)年浦賀奉行所与力となった。そして同六(一八五三)年富士見宝蔵番へ、翌安政元(一八五四)年には評定所留役へ転じた。

甫三郎が評定所留役となったころ、幕政は転機を迎えていた。嘉永六年のペリー来航を契機に、井伊直弼を中心とする開国派と、徳川斉昭を中心とする尊攘派の対立が表面化し、対立は、安政五(一八五八)年から翌年にかけて断行された安政の大獄へと発展した。そして評定所留役であった甫三郎も、尊攘派と見なされた水戸藩十職飼幸吉・

鶴飼吉左衛門や橋本左内・飯泉喜内らの探索に関わるのである(『橋本左内其他取調一件』公務九五ほか)。

その後浦三郎は、「嫌疑を受け官を停止」(『小伝』)させられ、安政六(二八五九)年小十人組番士、文久元(二八六一)年神奈川奉行支配調役、元治元(一八六四)年武蔵・上野の代官となり、明治維新を迎えた。

西洋砲術を学び、幕府歩兵第一大隊の指揮官を務めていた長男敬蔵を戊辰戦争で亡くした浦三郎は、失意のうちに明治元(一八六八)年一等勤番士として静岡へ下った。翌明治二(一八六九)年、浦三郎は孫であり敬蔵の長男である弥吉に家督を相続した(『嫡孫承祖願書』由緒書三七)。そして約一二年間を静岡で暮らしたのち、明治一二(一八七九)年東京へ戻り、その後病死した。

小笠原家文書に残る住所録(『会友姓名住所簿』公務一五二など)により、浦三郎の幅広い交際範囲を知ることが出来る。浦三郎死去の報も、彼と交流のあった栗本鋤雲・福地源一郎らに知らされた(『死去の通知及報知先住所』由緒書三九)。そして同家文書には榎本武揚が遺族に送った悔やみの手紙(『榎本武揚書簡』書簡一三五)が残されている。

以上貢蔵・浦三郎の略歴をみてきた。彼らの経歴を通して、幕末・維新期の激変する社会のなかで、堅実に生きながら歴史の波にのみこまれた幕臣の姿をみる事ができる。(石崎康子)

## 横浜開港資料館製作

# 映画一覽

横浜開港資料館では、当館独自の企画による16ミリ映画を製作しています。一部を除き、VHSビデオテープ版があります。上映時間は、次にあげる1から3までは30分、そのほかは15分です。映画、ビデオとも無料貸出をしていますので、学校、地域の学習会などの御利用をお待ちしています。

### 1 横浜開港資料館

昭和56年6月2日の横浜開港記念日にオープンした当館の概要をドキュメンタリータッチで紹介する。

2 絹のみちー上州から横浜

上州(群馬県)で生産された生糸が、利根川を下って横浜に運ばれてくるまでの足取りを現地ロケをまじえて紹介する。

### 3 港都横浜・神戸

文明開化の先達となった横浜と神戸。2つの街の類似性を、街の成立ちと対比しながら描く。

### 4 横浜の赤レンガ

レンガの歴史、作り方、積み方などを紹介しながら、横浜市内に点在する赤レンガ建物を丹念に追っていく。

### 5 黒船来航とかわらばん

ペリー提督率いる黒船4隻が浦賀に来航し、翌年日米和親条約が結ばれる

までの過程を瓦版を中心に絵巻や和本で紹介する。

6 横浜歴史散歩ー幕末の写真家F・ベアトともにー

幕末に來日した外国人写真家F・ベアトの撮影行を、現在の姿と対比しつつたどったもの。山手、金沢、鎌倉さらに厚木、八王子に足をのびしている。  
※VHSビデオを販売しています。

(価格 三五〇〇円)

7 知られざる史跡めぐりー山手・根岸編ー

あまり人目につかなかった山手・根岸地区の史跡を通して、横浜の歴史を新しい視点から描く。

### 8 横浜浮世絵

横浜浮世絵について、描かれるようになった時代背景、題材とその移り変わり、技法などを当館所蔵の資料を通して紹介する。

9 知られざる史跡めぐりー関内編ー

あまり紹介されることがなかった中区関内地区の史跡を通し、横浜の歴史を新しい角度から考える。

10 横浜のあゆみー開港から震災までー

当館所蔵の資料を駆使して、開港から関東大震災までの横浜の歴史をわかりやすく解説する。

11 知られざる史跡めぐりー西区編ー

西区内の知られざる史跡にスポットをあてて、横浜開港の歴史を描く。

### 12 横浜もののはじめ

開港後、横浜には様々な西洋文化が流入し、消化され広められた。関心の高いテーマ「もののはじめ」を、史実をもとに紹介する。

13 横浜歴史散歩ー金沢をめぐるー

鎌倉時代だけでなく、幕末・明治期の横浜の歴史にかかわる史跡もたくさん残されている金沢区を歩く。

14 ヨコハマのれきしー黒船から関東大震災までー

小学校中学年程度が理解できるように、横浜の歴史を親しみやすく紹介する。

15 波乱の半世紀ー横浜市の誕生から戦後復興までー

横浜市は平成元年、市政百周年を迎えた。明治22年の市制施行から大震災、戦災を乗り越えてきた、横浜市の半世紀を紹介する。

16 名主日記が語る幕末ー武蔵国桶樹郡生麦村関口家の日記ー

幕末期に生麦村(現在鶴見区内)の名主を勤めた関口家には、一四〇年間に渡って書き続けられた日記が残された。この「関口日記」をもとに当時の世相、生活などを探る。

17 横浜の芝居ー明治・大正期の庶民文化ー

明治・大正期、横浜には伊勢佐木町はじめ多くの劇場があった。当時の庶民の代表的な娯楽だった演劇、芸能を紹介する。

## 横浜新風土記稿

18

# 江戸時代の石の流通と

## 村の石工たち

本稿は、江戸時代後期の石の流通と石工の活動を紹介するものである。江戸時代の人々にとって石は貴重な生活必需品であり、コンクリートなど石の代替品がなかったことを考えると、莫大な量の石が商品として流通していたと考えられる。現在でも句碑や墓石などの石造物、さらには道路や堤防などの敷石などに当時のさまざまな石をみることができる。しかし、当時、どのような石が、どれほど流通し、どのようにして石造物が造られたのかは案外知られていない。そこで本稿では、残されたいくつかの資料を検討し、この問題を考えてみたい。

### 石の流通量について

まず、石の流通量については、安政三年（一八五六）の江戸入荷量が判明している。入荷量を記した資料は『東京市史稿』市街篇四四に収録された『重宝録』で、一年間に江戸に入荷した石の量が石の種類別に記されている。こうした調査が何を目的として実施されたのかは不明であるが、資料には「江戸表諸色船運送入津陸附荷高密々御尋」とあり、幕府が調査を命じたようである。また、文末には「廻船問屋

奥川・内海船方、飛脚問屋、馬宿共方にて江戸表え出入致候荷物不洩様相分申候」とあり、各運送業者が輸送量を上申したものと考えられる。

この資料によれば、江戸に入荷した石には、形態によって、いくつかの種類があった。その第一は、「一本・二本」と数えられる石で、「角材」の形態のものである。これらの石は、各地から七十一万本弱が入荷している。次は板材と呼ばれるもので、三尺板材が五万四千枚、大板二千三百枚、その他が一万八千七百枚となっている。さらに「一間、二間」（一間は一間立方）と数える石塊があり、全部で一万七千間が入荷した。その他、丸石五百五十坪、割栗石六百三十坪があるが、具体的な形態は不明である。

また、『重宝録』は石の産地についても記し、伊豆を中心に根府川や真鶴などの地名を見ることが出来る。さらに、上方筋からの入荷もあるが、近年は減少していると伝えている。

詳しい数字の吟味については今後の課題とせざるを得ないが、莫大な量の石が消費されていたことは間違いないからう。

### 石商人と石工

では、江戸に入荷した石は、どのような流通経路を経て各地の石工たちの手に渡ったのだろうか。『重宝録』によれば、先に示した莫大な量の石は「江戸表石問屋並仮組之もの共引受売捌候」とあり、まず石問屋が引き受けている。

石問屋については、明治十八年（一八八五）に発行された『貿易備考』に記述があり、享保六年（一七二二）に十六軒で仲間を結成し、以後、一時期を除き、幕末に至るまで、この仲間が独占的に石を扱ったとある。また、仲間の人数は時代によって変動したが、嘉永四年（一八五一）段階では十七軒の石問屋がいたようである。十七軒の内、十二軒は享保期以来の問屋であり、居住地と名前が判明している。また、残りの五軒は文化期以降に開店し、仮組と呼ばれていた。

残念ながら、幕末期の石問屋の資料は多くない。しかし、明治三年（一八九九）に、東京府が江戸時代の石問屋の商慣習を調査し、この報告書から幕末期の石問屋の実態を具体的に知ることが出来る。この資料によれば、石問屋は荷主と注文主とを仲介する立場にあり、取引ごとに五分から一割の手料を徴収している。また、問屋は、荷主に前貸をすることもあったようである。さらに、問屋が広い石置場を市中に持っていたこと、荷主と

の決算が毎年十月に行なわれたとある。では、このようにして江戸の石問屋に集荷された石は、その後、どのような経路を経て石工に渡ったのだろうか。この点について『貿易備考』は、享保六年（一七二二）以降、石仲買人が石問屋から石を購入していたと記し、江戸に集荷された莫大な量の石が石仲買人の手を経て市場に出されたことを伝えている。さらに、この資料は、天明五年（一七八五）段階で、江戸市内に三百五十人の石工がいたと記し、石が石問屋↓石仲買人↓石工という流通経路で販売されていたことを伝えている。

一方、幕末期には農村部にも「農間渡世」として石工を業とする者が増加し、彼らを通じて石が販売されることもあった。彼らは、江戸の石仲買人から石を購入し、周辺農村に売り捌くほか、直接、産地から石を購入することもあったようである。たとえば、生麦村（現在、横浜市鶴見区）の名主関口家の日記（『関口日記』）には、こうした記述が散見し、天保七年（一八三〇）五月三日の記事には「上総天羽郡金谷村」の石商人が「間地石」を船に積んでやって来たことある。また、嘉永五年（一八五二）閏二月一五日の記事には鶴見村（現在、横浜市鶴見区）の石商人が神奈川湊に入船した「伊豆石船」から土蔵の敷石を購入したとある。

### 農民の生活と石造物

では、次に農民の生活の中で石がどのように活用されていたのかをみてみ

たい。この点についても、それほど多く資料が遺っているわけではないが、ここでは先に紹介した『関口日記』に記された石についての記述をいくつか紹介してみたい。

『関口日記』の記述には、墓石・石灯笼・竈・石碑・土蔵の敷石・石工など石に関するものが極めて多い。この内、最も詳しいのは墓石についての記述である。現在でも墓石を建てることは人生の大きな仕事の一つであるが、江戸時代の農民にとっても同様であった。そのため、一つの寺院から数百の江戸時代の墓石が確認されることも珍しくない。

関口家の場合は、文化十年(一八一三)七月に菩提寺である安養寺の墓石を新らしくしている。この時、墓石を造ったのは鶴見村の石工仁三郎で、墓石の完成後、船で石を生麦村まで運んでいる。また、この時の墓石の代金は一両二分であった。さらに、この日記には、その後も、墓石に新らたに戒名を彫り込んだり、磨き直したりした記事が散見している。

一方、墓石に次いで建築物に石が利用された記事もかなり多い。たとえば、関口家では嘉永年間(一八四八〜一八五三)に土蔵を新築するが、この時は数年かかって敷石を大量に購入している。購入先は鶴見村の石屋や神奈川宿の商人で、「斑石」と呼ばれる石を数本から数十本単位で購入している。さらに、「玄関前の敷石工事」・「湯殿の石直し」・「雨落石磨直し」・「菩提寺の

石坂工事」・「石樋工事」など、さまざまな建築物に石が利用されている。

このほかでは、石碑・竈・石灯笼の購入についての記事も多く、石は日常必需品として重要な位置を占めていたようである。また、これらの品物については具体的な価格が記され、文政三年(一八〇六)八月一日に鶴見村の石工が造った竈が手間賃を含め一両一分と三百五十文、天保五年(一八三四)十月四日に房州の石屋から買った石灯笼が二分二朱などである。

### 村の石工

では、こうした石の建造物を造った石工たちは、どのような人々だったのだろうか。先に述べたように、幕末期になると、農村部にも多くの石工をみる事ができるようになる。そして、村の古文書にも彼らの活動を記したものが多く遺されるようになる。そこで、ここでは、こうした石工の一人である鶴見村の石工を紹介したい。この石工については内田四方蔵氏が既に紹介されているが、『かながわ歴史点描』、昭和書院発行)、ここでは新出資料を加え「村の石工」の実像に迫りたい。

内田氏によれば、この石工は苗字を飯島といい、歴代の当主は吉六・仁三郎・軍次郎・幸次郎・惣五郎を名乗っている。また、飯島氏は近世後期になって小田原宿から鶴見村に移住したと伝えられ、その後、代々鶴見村で石工業としたといわれている。さらに、歴代の当主の作品は、鶴見区や金沢区か

ら川崎市にかけて広く遺り、鳥居・狛犬・供養塔など三十七点の所在が確認されている。そうした作品に墓石などを加えれば、その数はより多くなるものと思われる。

ところで、飯島氏については鶴見村の名主家文書(『佐久間家文書』横浜開港資料館蔵)に、いくつかの記録が入っている。その第一は、江戸時代の戸籍にあたる「宗門人別帳」で、天明三年(一七八三)から嘉永四年(一八五二)までの約五十冊の台帳に飯島氏が記載されている。また、寛政十一年(二七九二)・文政十年(一八二七)・天保十四年(一八四三)・嘉永三年(一八五〇)の「村明細帳」にも石工として飯島氏の歴代の当主の名前が記載されている。

この内、「宗門人別帳」については、天明三年(一七八三)以前のものに、飯島氏の名前が見られないことから考え、この時期に小田原宿から移住したものとされる。また、移住当初の当主は吉六で、弟仁三郎とその妻えんの三人家族であった。さらに、天明三年(二七八三)のものには、持高の記載がなく、「四郎左衛門地借」と肩書きが付いている。

しかし、その後、土地を入手したうえで、仁三郎が当主となった寛政十一年(一七九九)からは、持高一石九升五合六勺と記載されるようになる。また、その肩書きも「地借」から「百姓」へと変化していく。さらに、仁三郎の次男である軍次郎が当主となる文化年

間(一八〇四〜一八一七)には、持高が四石九斗五升三合二勺にまで増加している。

また、それにとまない家族数も増加し、軍次郎の息子である幸次郎や惣五郎(天保十五年に吉六と改名)が当主となる天保年間(一八三〇〜一八四三)には数人の「下女」を雇用するまでになっていく。こうして、飯島家は鶴見村移住後、五代にわたって石工として活動するとともに、天保期までに鶴見村の「百姓」としての地位も確立していったものと考えられる。

次に、歴代の当主が造った作品については、横浜市教育委員会が調査し、そのいくつかは『横浜市文化財総合調査概報』や『横浜市文化財調査報告書』に収録されている。この内、港北区師岡町の熊野神社の石鳥居、同区中川町の杉山神社の石碑、緑区市ケ尾の東福寺の供養塔、鶴見区鶴見町の鶴見神社の石鳥居、戸塚区戸塚町の富塚八幡宮の狛犬、金沢区金沢町の称名寺の地藏菩薩などが主なものであるが、石工と



称名寺境内の地藏菩薩

しての技術が親から子へと確実に伝えられている様子がよく分かる作品ばかりである。

石工の世界

このように鶴見村の石工は、江戸時代後期に城下町から村に移住し、しだいに村の職人として活躍するようになっていったが、こうした事例は珍しいことではなかったと思われる。江戸時代後期になると東海道沿いの宿場や村々では人口が急増するが、その原因の一つに大都市からの人口流入があり、そうした人々の中に職人たちが含まれていたと考えられる。

また、江戸や城下町の職人が、移住しないまでも、「渡りの職人」として仕事を求め、村々へやってくることも多々あったようである。ここでは、そうした職人の実態を示す資料を紹介し、江戸時代後期の「職人の世界」をみてみたい。なお、紹介する資料は、嘉永二年(一八四九)のもので、先に紹介した「佐久間家文書」に含まれるものである。

(資料一)

御尋ニ付、以書付奉申上候

築山茂左衛門元御代官所武州橋樹郡神奈川宿百姓五郎兵衛店仁三郎並抱職人吉次郎・下女もよ、一同奉申上候、当六月十九日晝、石工職人吉五郎、刃物を携立入、吉次郎・もよ江手疵為負候始末御尋ニ御座候

此段、仁三郎申上候、私義借宅にて無高、家内五人暮、農間石工渡世いたし罷在候処、本所辺出生之由、石工渡り職人吉五郎、去申年中より折々罷越、日雇稼度由申候二付、渡世向世話敷

節は日雇手伝為致候処、酒狂之上、町内之もの共江対し雑言等申掛ケ口論ニおよひ、難差置申断、其後雇員候様申参り候得共、敵敷及断候二付、同職吉次郎儀、吉五郎随分悪敷様申触、職業差障り候儀と存込候や、当六月十九日晝、刃物携、表戸を押し立入、臥居候召抱吉五郎江理不尽ニ疵為負、右物音ニ眼覚、下女もよ起出候処、是又被切掛深疵を請、両人声立候驚家内之もの共起出候所、最早吉五郎は逃去候二付、早速隣家之もの共江為相知、相尋候得共何方江逃去候哉不相知、直様宿役人江申出、医師為呼寄療用手当仕候

(中略)

嘉永二酉年七月

築山茂左衛門元御代官所

武州橋樹郡神奈川町

百姓五郎兵衛店

仁三郎

右仁三郎召抱

吉次郎

同下女

もよ

関東御取締御出役

中山誠一郎様

(資料二)

御尋ニ付、以書付奉申上候

築山茂左衛門元御代官所武州橋樹郡鶴見村百姓吉六奉申上候、私方日雇ニ遣ひ候吉五郎義乱妨および候始末御尋ニ御座候

此段、私義高式石余所持、家内五人暮、農間石工渡世罷在、神奈川宿石工仁三

郎は私末家にて前書吉五郎儀石工渡り職、旅稼いたし候故、両家にて折々日雇ニ遣ひ見知候ものニ有之、当三月中、吉五郎罷越、日雇稼いたし度置候様申、折節渡世繁多ニ付、相雇稼為致置候処、当四月十七日、私義渡世用にて他行いたし、夜四ツ時頃、帰宅いたし候処、吉五郎義熟醉之上、茶碗其外器類打散し、私母もと口論いたし候様子ニ付、取支候へは悪口雑言勢ひ甚敷手余り難取静無抛居合候吉次郎俱ニ取押、有合候藁繩を以、縛り候所、右騒動を聞付、隣家百姓庄八・同政五郎欠付来り、吉五郎を連行、翌朝相詫候旨ニ候得とも生質酒乱とは乍申、持前喧嘩口論を好み候心底難見届、以来不雇遣候害申断候故、其俵立去り候義ニ御座候

嘉永二酉年七月

築山茂左衛門元御代官所

武州橋樹郡鶴見村

百姓 吉六

この資料は、一人の石工がおこした傷害事件について記したものである。

この事件は、吉五郎という石工が、嘉永二年(一八四九)六月十九日の明け方、別の石工と一人の女性を刃物で斬り付けたというものであった。事件そのものも大変興味深いものであるが、ここでは事件に登場する石工たちに注目したい。

まず第一に犯人の吉五郎は、「渡り職人」と呼ばれる石工で、江戸本所出身の人物であった。資料によれば、彼ら「渡り職人」は繁忙期に雇われ、日

雇という形で生活していたようである。次に被害者となった吉次郎は、神奈川宿の石工仁三郎の店で修業中の人物で、資料には「抱職人」と記されている。おそらく、職人の世界では「渡り職人」や「抱職人」が広く存在し、修業中は定住することなく各地を廻ることも珍しくなかったものと思われる。

一方、彼らの雇用主であった神奈川宿の石工仁三郎は、「五郎兵衛店仁三郎」と記され、神奈川宿の「地借・店借」身分の人物であった。幕末期の宿場には広汎に「借地・店借」が存在したが、仁三郎もそうした人物の一人だったのである。

また、この人物は、先に紹介した鶴見村の石工吉六の「末家」と記され、鶴見村の飯島氏から「暖簾」を分けてもらった人物のようである。吉六と仁三郎の関係は分からないが、なんらかの血縁関係があったのかもしれない。鶴見村の飯島氏も初代が鶴見村へ移住した時は、同様の形で「暖簾」が分けられたものと考えられ、石工の世界では、こうした形で店が広がっていたようである。

以上、石の流通と石工について概観したが、石工の技術は「地域の文化」ともいえるべきものであり、その技術の伝播や職人たちの実態を知ることが、地域の歴史を考える上で重要なことと思われる。横浜開港資料館では、今後職人たちの資料の発掘に努めたいと考えており、読者の方々の情報を期待している。

(西川武臣)

横浜人物小誌 31

外国人墓地管理人の花屋さん

ジャーメイン

私がジャーメイン (John Joshua Jarnain) に興味を抱いたのは、外国人墓地の歴史を調べていた時のことである。明治三年(一八七〇)居留民から選ばれる委員会 (the Committee of the Yokohama General Cemetery) が発足し、墓地の管理運営にあたるようになるが、ジャーメインは当初から一七期にわたって管理人 (Superintendent) を務め、二五年死去の後も、未亡人のメアリー・サダが、委員会の計らいで子供達とともに管理棟に住み、墓地台帳を管理することになった。したがって正規の管理人は長らく任命されなかったのである(一)。

そのジャーメインが百合根貿易の先駆者として著名であることを知ったのは、去年、横浜植木株式会社社史編集に携わっている方々とお付き合い合いが始まってからである。鈴木一郎『日本ユリ根貿易の歴史』(2)には、彼について「日本におけるユリ根貿易商の開祖」と記されている。同書によると、彼は一八四〇年、ロンドン郊外の園芸地帯、クロイトンの生まれ、父親は植物学者、バラの栽培家として園芸界に知られる人物だったという。若くして軍籍に入り、海軍曹長として下関戦争

支援のため元治元年(一八六四)横浜に派遣され、そのまま駐屯軍の一員として滞在、慶応三年(一八六七)除隊し、クラマー商会に入社、百合根の輸出を試みるが輸送中腐敗して失敗、翌年初めて成功する。これが「ユリ根貿易のそもそもの濫觴」だという。



J. J. ジャーメイン  
鈴木一郎『日本ユリ根貿易の歴史』より

しかし、その記述には訂正を要する部分もある。ジャーメインが横浜の史料に初めて登場するのは一八六六年二月、クライスト・チャーチ牧師ペイリーによる解雇通知である(3)。したがって彼の除隊はこれより以前のことである。明治に入ると、その名はまずW・H・スミスの経営する横浜ユナイテッド・クラブのステュワードとして(4)、また同じくスミスの主宰する山手公園のフラワー・ショウの担当者として現れる(5)。彼同様退役軍人であるス

ミスとの関係の深さが注目される。複数の居留民の回顧談によると(6)、西洋の野菜と果物を横浜に紹介したのはスミスとペイリーであり、前者の農園は山手六〇〇番あたりの広い土地に、後者のそれは五二番あたりにあった。そして、スミスとともに栽培に従事したのはジャーメインだったという。外国人人名録を見ると、スミスの農園の一部とおぼしき六三番に、明治五年版ではクラマー (C. Kramer)、八年版ではジャーメインの名が記されている。両者はともにスミスの農園の管理責任者だったのでないか。クラマーの名はこれ以外の史料には現われない。その存在は過大に伝えられているように思われる。

ジャーメインは一六年頃から、墓地の管理人を務めるかたわら、自分の名義で花の種子や球根・苗木の輸出入、花や果樹の販売に乗り出した。葬儀用の花輪や花十字の製作も手がけている。死後、その事業も遺族に継承されたようである。鈴木前掲書によると、仕入主任をしていた藤沢惣助の援助により、百合根輸出の仲介業を営んでいたという。外国人人名録には四二年版から四四年版まで、元町の代官坂にジャーメイン商会の名が見える。大正一〇年版『横浜商工案内』では、営業種目は洋花、代表者は藤沢浅次郎となっている。一五年版『神奈川県職業別電話名簿』には、本牧一四三〇番地に藤沢浅次郎の経営する藤沢花園の名が見える。鈴木前掲書では惣助はその「前主」と

あるから、先代だろうか。石田兵一氏のご教示によると、それはまた「ジャーメン園」とも呼ばれていた。ジャーメイン、藤沢両家の共同事業だったのでないだろうか。

鈴木前掲書によると、ジャーメインは日本婦人と結婚し、二男二女を儲けた。未亡人のメアリー・サダは昭和六年に死去、夫とともに山手外国人墓地八区に葬られている。子供達は神戸に移住し、ジャーメイン・デイヴィス商会を設立する。一五年頃には横浜支店も開設された。戦後も経営は続けられたが、つい先頃の平成元年、経営権をジャーメン・TアンドS株式会社譲り、一族はアメリカへ移住したという(7)。

注  
(1) 拙稿「山手外人墓地と居留外国人」武内博『横浜外人墓地』(山桃舎)所収。

(2) 日本球根協会、一九七一。

(3) The Japan Times, 1866. 2. 17.

(4) The Chronicle & Directory for China, Japan & the Philippines, 1869

(5) The Japan Gazette, 1874. 5. 19

(6) 『ジャパン・ガゼット横浜開港五〇年史』(市民グラフ・ヨコハマ)

(7) 所収モリス及びラッセル談話

横浜開港資料館編『横浜もののはじめ考』(西洋野菜)の項参照。

(7) 神戸での一族の足跡については、神戸市立博物館学芸員田井玲子氏、およびジャーメン・TアンドS株式会社よりご教示を得ました。

(倉藤多喜夫)



閲覧室で人物についての質問を受けることがあります。今回は、開架書架に備えた、横浜にゆかりのある日本人を探す手掛かりになる図書を、紹介し

ようと思います。

○『横浜成功名譽鑑(復刻版)』(昭和五五年一〇月 有隣堂発行 九七六、六、五頁)

本書は、明治四三年七月、横浜商況新報社が開港五〇年を記念して発行したものの復刻版。官吏及公吏、功労者及有力者に続いて、四一の職業別に分けて個人名、商店名、会社名が記されている。

○『横浜近代史辞典(改題横浜社会辞彙)』(昭和六一年一月 湘南堂書店発

えた。これまで充分には明らかにされてこなかった明治時代の居留地の具体的な姿を紹介する。

(3)『二〇世紀初頭の横浜』(仮題) 2/3~4月中旬 日露戦争後、日本の社会構造が激しく転換するなかでの横浜の変化を、多角的に明らかにする。

▼展示

(1)『横浜パノラマ図―絵と写真でたどる街のうつりかわり―』 8/5~10/28 幕末開港期から明治・大正、関東大震災、昭和期に至る横浜の一覧図や全景写真を一堂に集め、横浜市街の変遷をたどる。

(2)『明治のコスモポリス―横浜の外国人居留地―』(仮題) 10/31~1/31 明治三十二年に改正条約が施行されるまで、横浜には外国人居留地が存在した。それはさまざまなかたちで都市形成や市民生活のあるかたに影響を与

行 一三五二頁)

本書は、大正七年六月、横浜通信社が発行した『横浜社会辞彙』再版を復刻したもの。(初版は、大正六年五月発行)。人物部、銀行会社商店部、劇場病院市場割烹店其他の部、官衙学校之部、名所旧蹟神社仏閣地名之部他に分けて、目次が付けられている。

○『神奈川県史 別編1 人物』(昭和五八年七月 神奈川県民部史編集室編 財団法人弘済会発行 八一六、五八頁)

本書は、古代から昭和五〇年まで、

(3)展示関連講座「二〇世紀初頭の横浜」 2月27日からの毎週土曜 全5回 明治後期から大正初期にかけて、生糸など第一次産品の輸出にたよる貿易都市から、重化学工業を基礎とする工業貿易都市への転換を図りつつあった時期の横浜について、政治・行政・経済の側面から説明する。

いずれも講師等詳細が決定しだい、「広報よこはま」にて申込み要領を発表します。

▼寄贈資料

(1)彩画「大正時代商家の葬儀」など 五点(東京都港区 高寺正雄氏) (本誌2頁~5頁の座談参照)

(2)「井伊掃部守大老立像」など慶寺丹長作銅像製作モデル 五点(保土ヶ谷区天王町 慶寺香乃氏)

(3)写真「横浜市議員」 一点(磯子

神奈川県に出生・居住、または同県で活躍した凡そ四五〇〇名の人物を収録している。

○『明治・大正・昭和横浜人名録』(一九八九年一〇月 日本図書センター発行 八五、五四、九〇頁)

本書は、いずれも交詢社発行の『第十五版 日本紳士録』(明治四三年二月)、『第二十九版 日本紳士録』(大正一四年一二月)、『第四十版 日本紳士録』(昭和一二年四月)を底本として、横浜の部分で復刻したもの。(上田由美)

区下町 赤尾亀代氏)

(4)潮田町関係文書、福沢諭吉著作書籍及び市場町史蹟絵葉書など 二〇点 (鶴見区市場上町 梶木寛之氏)

(5)陸地測量部作成地形図 大正6年横浜など 二点(群馬県前橋市 中村数男氏)

(6)横浜市青年連合団「御大礼記念 太鼓技奉仕記念」ほかメダル 二点 (磯子区岡村 根津恭氏)

▼出版物

(1)『横浜のあゆみ』 価格八〇〇円 昭和61年発行のものを、若干改訂しました。豊富な図版とともに、横浜の歴史を概観しています。

▼異動

7月1日付で、横浜開港資料館長に田中常義が着任しました。

